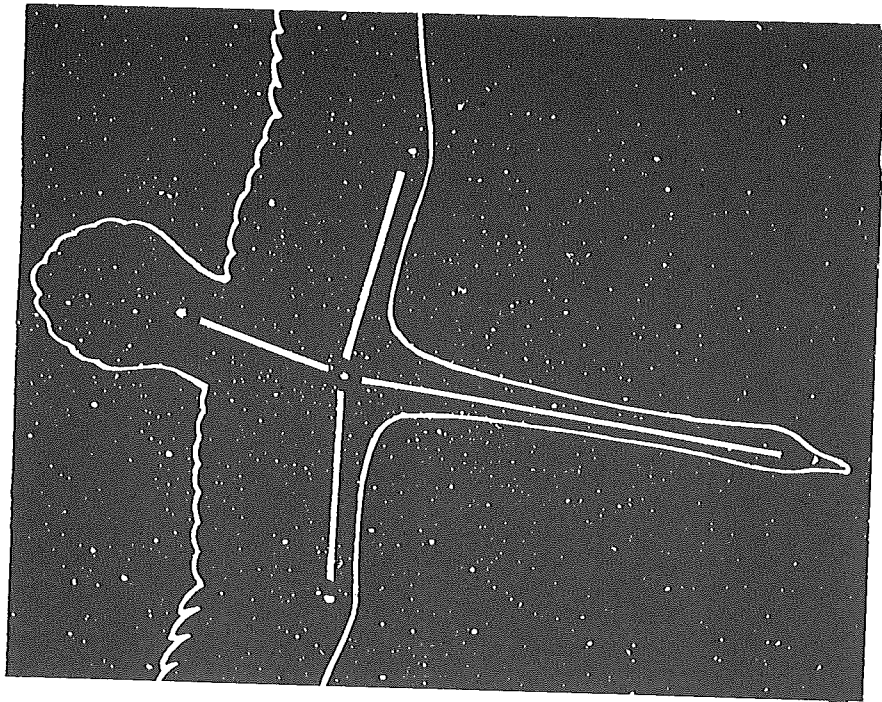


た星であり、惑星に似た伴星が発見された星でもある。また白鳥座A
は強力な電波天体として知られる。

カラーブックス 星と星座 P.61

保育社発行 61 昭和四十七年七月一日 草下英明著



白鳥座の全景

に果てた比類なき武人ヤマトタケルノミコトの心は、だれも知らない。」
 (わたしたちの伝説、読売新聞社社会部編P.51) ふるさとは遠くに在りて思ふもの、そして悲しく唱ふもの」と近代詩人も亦武尊の心情をくりかへしてゐる。

「美しく、偉大、そして悲劇的」これが永遠の生命を希ひつゝ、も果し得ない人間の宿命に対する文学精神の根底となつてゐる。そして武尊の運命に自己の悲しさを託してゐるのが古事記以来の文学精神の悲劇的伝統なのである。

「白鳥は悲しからずや……」とは、此の伝説歌謡に始まつてゐるのであらう。

秋の星座

— 以上 —

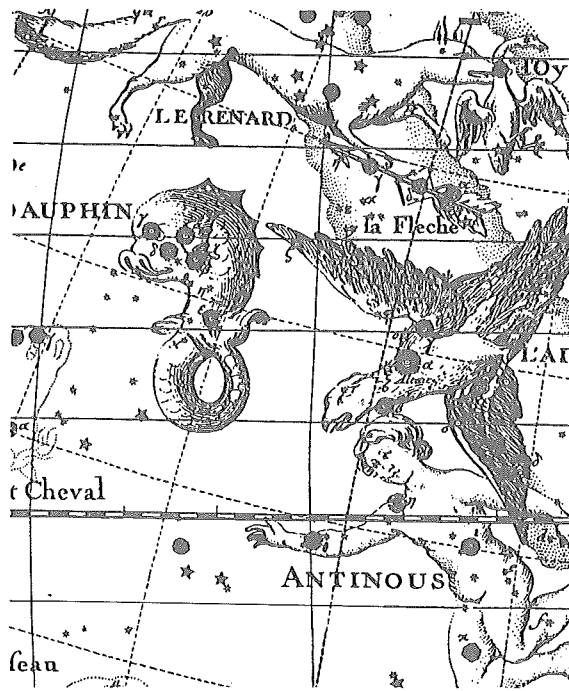
秋の夜空は、華やかな星座が少なく寂しいとよくいわれる。にぎやかな冬の星の大合奏に先立つ静かな前奏曲だともいう。しかし、秋の空は夏のそれに比べると水蒸気が少なく、ずっと澄み渡り、星の光もやや涼しく冴えわたる季節でもある。

われひとり 鎌倉山を 越えゆけば 星月夜こそ うれしかりける
 (肥後) 鎌倉時代の女流歌人の作だが、この星月夜は、「星と月の出ている夜」ではなくて「星づく夜」、つまり「星ばかり見える夜」のことだ。しかも秋の冴えた星空を表現しているのだ。

秋の夜空でただ一つ、南の空に光る一等星は南のうお座のフォマルハウト、中国名、北落師門だ。いかにも秋にふさわしい寂しげな星である。

マリンランドなどで、ひょうきんな芸を見せるいるかは、大昔から人間に親しまれてきたようだ。楽人アリオンを助けたいるかは天の星

座となつて、初秋の空に輝く。四つの星が描く小さな四辺形は、不思議と目立って見える。



いるか座 (フラムスチード星図)

白鳥座の北十字

秋から初冬にかけて、天頂を飾る白鳥座の北十字架は、ノーザン・クロスとして名高い。ギリシャ神話では、スパルタ王妃レダのもとにかよった大神ゼウスの変身した白鳥であるが、その他にも多くの話題に満ちている。白鳥のくちばしにあたるアルビレオは、全天一の美しい二重星であるし、北アメリカ星雲や網状星雲などのガス星雲、暗黒星雲も多い。白鳥座六十一番星は五等星であるが、最初に距離のわかっ

河内の蕉市の邑へ↓翔天↓国内各地へ。

(ii) 白鳥は、朝鮮半島に渡り、そこから北に翔ってシベリアへ。

註① “出雲の白鳥” (門脇益市・P. 60) には、「シベリアから出雲へ…畧…そのルートは、まだ何人にも正確にわかっていない。朝鮮半島を迂回しながらくるのだろうかという説、あるいは気流にのつて一挙に、シベリアから日本海を横断してくるのだろうかという説。あるいはまたシベリアから北海道、そして東北地方、更に日本列島を南下して点々と各地の安住の場所を求めて飛来するのだろうかという説など、さまざまの説があるが、まだどの説も完全には実証されていないという。」

註② 越前の国 (福井県) 敦賀市の氣比^{キヒ}神宮の本殿のすぐ傍に白鳥の祠がある。氣比の大神 (伊奢沙別命) は、対岸の新羅より渡来された方であり、白鳥も亦対岸の新羅より飛来したのであらうか。太古神話時代から素戔嗚命や、その他の神々、皇祖の大神が渡来せられ (高天原も韓国に在ったとの説もある)、沖の島の白 (素) 兎も、白い服装の半島人も、そして白鳥も亦対岸の半島より渡来したのであらうか。

註③ 白鳥座から天降つて来るのであらうか。星座の図録を見ると、見事な白鳥座がある。「みごとな十字架の形が目に入ってくるのが白鳥座である。北十字といわれて南天の十字星と比べられる事が多い。」(星と星座草下英明・P. 125 - P. 126) とすると、宇宙の白鳥座から天下つて、日本人となった白鳥の子孫である日本武尊は死後白鳥となつ

て翔天して白鳥座の宇宙人となり、その子孫が年に一度、武尊の故郷である日本へ天降つて来るのであらうか。空想はまことに楽しい。而し「白鳥は悲しからずや空の青海のあをも染まずたじよふ」の歌は悲しい。武尊の漂泊の魂へのの晩歌でもあらうか。「夜鳴く鳥の悲しさは、親を尋ねて海こえて、月夜の国へと消えてゆくぬれた翼の銀の色」の歌は、幼時に父母に死別して父母の愛情に恵まれなかつた武尊が、チチ (父・チチ (乳)) と父母を呼ぶ心の叫びでもあらうか。(千鳥は乳鳥ともかく)。「放浪とは、流離^{きずろひ}とは、自己の身を寄せるべき定まった場所をもたない状態のことである。その他流浪とか漂泊、漂流といったことばにも、なにかしら私たちの心の奥深くに眠つてある郷愁のようなものを呼びさます響きがかもつている。」(さすらひびとの思想・松原新一・学習研究社 P. 5)

○註(1) 日本書紀・仲哀天皇の巻に、越の国より白鳥四隻^{たてまつ}を貢つて鳥を送る使人が道河の辺にて、蘆髮蒲見別王^{あはぶみわかみ}にあって、蒲見別王が「白鳥と雖も焼かば黒鳥とならない」といつてむりにもつて行き、天皇より誅せられた話がある。

(2) 日本には黒鳥は渡つて来ない様である。旧ソ連モスクワ郊外の池で白鳥黒鳥が仲よく泳いでいるのを見て来た。

三

「白鳥がなぜ帰りついた大和を再び立ち去ったかは、だれも知らない。若いときから、その生涯のすべてを国内の平定にささげて、つい

古典古事記」としての古事記から、『文学的・浪漫的・人間愛に基く古事記への開眼となつた忘れ難い名編である。』

これ以前以後に誰一人としてこの「第三の神放ひ」を述べたものは管見に入る限り見当らない。そして博士の御意見ももう以後には出てゐない。「第三の神放ひ」とは、博士は何を予測(想)してをられての言であらうか。博士にして然り況や学海の泡沫に過ぎぬ身の又何をか語らむ。

只、「白鳥翔(昇)天の終末の美しき悲しさ」を思ふたびに、古事記編纂の文学精神を今更に見直し、考へ直し、以後の日本文学に伝統的に流れる「漂泊と哀愁の精神」の源流を茲に見出すのである。それと同時に「ものあはれ」の本居宣長が「源氏物語より古事記へ」と見出して行つた「文学精神」ものあはれ「の昇華を思ふのである。

もし無事で都に帰還せられたなら、——そうでなかつた所に此の伝誦の文学的価値があるのであるが、又そう考へない所に文学者としての価値もあるのであらうが、——敢へて愚考を列ねると、

(一)やはり都に落着けなくて又々征討に差遣せられたであらう。(古事記の文によつて思ふに尊は敬遠せらるべき存在でしかないからである。)雄々しく、心美しき人、必ずしも良き運命を辿らない事は今来古往皆同じである。

(二)次の仲哀天皇・神巧皇后の章に見て、「九州に再度派遣せられ、戦死又はその他の事で薨ずる事になるであらう。(御子の仲哀天皇は、神の言を用ひ給はずして崩じ給ふ。或は賊矢に中りて崩じ給ふ。)

(三)もし筑紫にて薨ずる事なければ、更に命を受けて半島に渡りて、尊は帰りに給はず、(神功皇后新羅征討の事よりして)白鳥となり天高く翔り給ふ事になる。

(四)現在世界で白鳥の繁殖地はシベリアの北部である。「オオハクチヨウ」は「コハクチヨウ」よりもすこし南の内陸部で繁殖する。

(宇田川竜男・白鳥の大旅行P.90)そして冬になると、樺太を経て日本に渡つて来る。ウラジオから別れて朝鮮へ行く組もある。(全P.90)

(五)日本各地に在る白鳥神社と白鳥伝説に見て、日本列島の各地に昔は棲息してゐたのであらう。遠くシベリヤ迄飛んで行きそこで棲息し、子孫繁盛せられた尊の御子孫が尊の望郷の精神を伝へて今に尊の故郷ヤマトの国日本に帰つて来るであらうか?日本の大昔にシベリヤまで翔つた「武尊の魂魄」を考へる事は私の抑留生活のシベリヤ体験が然らしむる空想であり、武尊伝誦の児童文学化でもあらう。

以上は、高木博士、『日本武尊の浪漫精神』中の「第三の神放ひ」からヒントを得た恣意による妄想であり、白鳥伝誦の蛇足である。やはり「一切の地上的なもの、世俗的なものから、超脱し、おのれの魂を白鳥に乗せて自在に高潔に天翔り行く、このヤマトタケル伝説こそ古事記物語の圧巻である。」(古事記の世界・萩原浅男P.266)に同感共鳴するものである。

(四)第三のみやらひ補説

白鳥翔天考 補説

③第三の追放について

(イ)P.43—P.44(抜刷)

(ロ)第三の部やらひ(補説)

(i)白鳥は、能褒野の御陵より↓伊勢神宮に御奉仕の御姨倭比賣の命へ報告に行き↓伊勢・四月市の海岸へ↓大和の琴弾の原へ↓

△万葉九一1687 白鳥、鷺坂山、松影ニ宿リテ而往奈夜毛

深住ノ手

△紀伊国名草郡・尊は御惱重くならせ給ひて終に失せ給ひにけり白鳥

(近江国千の松原より)

となりて南を指して飛びたまふ。……尊に仕へる人々

別を悲み奉りて、跡目につきて行く程に紀伊国名草

郡に暫く落ち留りけるが、此所を悪くや思しけん東

国に飛び返り尾張国松子の島にぞ飛び行きける。(平

家物語・剣の巻)

(イ)西方

△讚岐国

(鶴)

・日本武尊終に崩じ給ふ御年三十白鶴と変じて西を指

て飛去讚国白鳥神社と頭れ給ふ。(源平盛衰記緋巻第

四十四)

命「讚岐国造立嗣奉レ之云云」(日本武尊の胤裔讚岐

綾君の奉祀)

(鶴)

・昔、日本武尊が近江の国で亡くなれると、その御

化身が「羽の白鶴となつて大和に行きそれから」はる

く「讚岐の国に飛んで来て、今の鶴那の辨天さまの

ある所にとまつて羽を付め、次に今の白鳥神社の所

について死んでしまつたと云ひつたへられてゐる。

そこで白い鳥が死んだ所即ち白鳥と云ふやうになり、

日本武尊を祀る白鳥神社が出来たといふことである。

(讚岐民話集・三木春露 P. 38)

・白鳥明神——在大内郡、祭神日本武尊……伐西戊一

平東夷終歳之十祖 謚神烈天皇 屍為白鳥昇天

或云白鳥西飛止于讚州(和漢三才図絵日本讚岐)

・「この郡白鳥村に今も白鳥大神宮と云あり海辺にて

いとく大なる森なりこの森にいみじく大なる白

鶴の昔より今に住る長は七尺ばかり、頭の大さは人

の頭の如くなりをりく森の外へも出居ることある

に人あまた郡来るに逢てもいさ、かも怖る、けしき

なしいとぞ土人の云伝へたるは倭建命此鶴に乗り

て此地に來座りと云伝ふと彼國人の説なり」(記伝

二十九景行)

△霧島峰

・白鳥権現——「性空上人靈島の靈窟を巡視するに大

池あり池側に坐して法華經を誦誦するに忽然として

老翁來り我は日本武尊なり白鳥と化して此の峯に住

すること久し師の誦經苦行の徳に感じて身を現すと

いへり……」

③ 第三の追放について

(イ)

「第一の神やらひを克服したまうた命を待つてあたものが前述のや

うに第二の神やらひを見事に克服したまうたと仮定される命に第三の

神やらひが待つてゐないと誰が保障し得るか。こゝに命の悲劇的な運

命の桎梏があるのであつて、かうした謂はば因はれた魂が、その死に

よつて始めて完全に解放された時、遙々大和から下り着きたまうた后

の御子達の御嘆をよそに白鳥と化して翔り去り給うたといふ事は奇蹟

といふにはあまりに真実必然な出来事でないならぬ。」以上は、

高木市之助博士著、「吉野の鮎——記紀萬葉雜攷——」中の一節、日本

武尊の浪漫精神 (P. 34 | P. 35) 中の名文であるが、神典古事記・

たちの伝説 P.51)

(二)行方は、(1)天にのぼるものと(2)国内に留るものとの二種類が見られる。

(1)天にのぼるもの、

△古事記

・中巻
・景行天皇

「故、自_レ其国_ニ飛翔行、留_レ河内国之志_ニ幾_ニ。故於_レ其地_ニ作_レ御陵_ニ鎮座也即号_レ其御陵_ニ謂_レ白鳥御陵_ニ然亦自_レ其地_ニ更翔_レ天_ニ以飛行_ニ」

△日本紀

・巻第七
・景行天皇
四十年

「時日本武尊化_レ白鳥_ニ從_レ陵出之、指_レ倭国_ニ而飛。……於是、遣_レ使者_ニ追_レ尋_レ白鳥_ニ則停_レ於_レ倭原_ニ彈原_ニ仍於_レ其処_ニ造_レ陵焉白鳥更飛至_レ河内_ニ留_レ旧_レ市邑_ニ亦其処_ニ作_レ陵故時人号_レ是_ニ三陵_ニ曰_レ白鳥陵_ニ然逐_レ高翔_レ上天_ニ」

△神皇正統記

「伊勢国能褒野ニオサメタテマツル白鳥ト成_レテ大和国ヲサシテ琴_ニ彈原_ニニトマレリ其所_ニ又陵ヲツクラシメケレバ、又飛_テ河内古_ニ市_ニニトドマルソノ所_ニ二陵ヲ定_レラレシカバ白鳥又飛_テ天_ニニノボリヌ仍_レ三ノ陵アリ」

(2)国土に留るもの

(イ)東方

△尾張国松子島

・白鳥となりて南を指して飛び給ふ……尊に仕へる人々別を悲み奉りて跡目につきて行く程に紀伊国名草郡に暫く落ち留りけるが此所を悪しくや思しけん東国に飛び返り、尾張国松子の島にぞ飛び落ちける。……其所をば白鳥塚と名づけたり。日本武尊は白鳥にて飛び落ち給ひて神になる今の熱田土明神是なり(平家物語・剣の巻)(尾張名所図絵上)

・尊がなくなられた時その体から魂が化して白鳥となり飛びたつたその留まつたところどころに尊の墓を

△下総国

(ロ)畿内

△大和国

山辺郡
朝和村
長柄

作つたのが白鳥だといふので名古屋市熱田にも現存してゐる。(熱田神宮の西約三丁熱田白鳥に在る)

・白鳥沼——有名な白鳥沼はこの近く(本館町橋神社)に在つて、其処に泛ぶ二羽の白鳥の一羽は弟橘姫命の御化身、一羽は日本武尊の御化身であるといはれてゐる。(藤沢衛彦・日本伝説研究第一巻 P.330)

・三羽の白鳥——長柄の村社白鳥神社は祭神日本武尊、昔日本武尊が薨ぜられると突然その御姿の中から三羽の白い鳥が飛んで出たそして御姿の周りを三周した上、空高く飛去つたが遂にこの長柄の南五丁の処におりた。そこにその鳥を祭るために建てられたのがこの白鳥神社だといふ(高田十郎編・大和の伝説 P.94)

・白鳥居神社は政始村白鳥居の西の森にある。昔、日本武尊が伊勢の能褒野に薨ぜられた時、其地に葬つた所、其墓から一羽の白い鳥が飛出し西南に向つて去つた。鳥は一度伊勢の某地に下り次に此村のコトホラ山に下りた。それで其地に宮を建てて日本武尊を祀つたのがこの神社である。白い鳥が来た所だから白鳥居神社といひ、又大京の名ともいふのだといふ(P.143)(大和の伝説・高田十郎編)

・鷲坂山——日本武尊薨去の時、白鳥となり給ひ西方をさして飛び去らせ給ひぬ而してその鳥の行落ちたる山を鷲坂山と云ひ山城国にありと伝ふこれ当社をいへり(社寺大観 P.290)

うた事も亦奇しき因縁である。

(三)白鳥伝誦(伊勢国内)

・白鷲——「享保の頃龜山城主板倉重治、武備(日)

塚を以て尊の御陵と定めた。当時の古記録九々五集

に「武部墓龜山ヲ去ル十五里余長沢村の北鞠ヶ野ノ

中ニ在リ又之ヲ能褒野墓ト謂フ……又曰ク白鷲一雙

常ニ墓上ニ遊鳴ス而シテ近來之ヲ見ズ……源頼朝卿

其ノ野ニ狩シ次テ彼ノ鷲ヲ取ラント欲シテ得ルコト

能ハズトイフ」(龜山地方郷土史)

・高飛(イ)……石薬師村の歴史を思ふにつけて最も忘る

べからざるは、数多の興味ふかい説話に富んだ閩歴

を以て、上代史を飾つて居らるる英雄日本武尊であ

る。尊が……空しくなり給うた其の能褒野は、石薬

師村から遠くない。殊に尊の霊が白鳥となつて高く

飛び給うたといふので、高飛といひ、更に之を訛つ

て高富といふ名は、やがて吾が村の古名である」(P.

153)(佐々木信綱華甲記念文集)

・高飛(ロ)——「この石薬師村はなあ、え、村や日本武

尊さまの御たましひが白鳥となつて能褒野の方から

此方へ高く飛んでおいでになつた。それをいち早く

見つけたのが此の村の百姓で「高飛ぶ、高飛ぶ」と

空を仰いでたたへましたのや。すると大きな木の梢

におとまりになり、やさしい目でじつとこの村を御

覧になつた。それから此の村を高飛村といひ、後に

高富村といつたのが、また石薬師村といふやうにな

つたのや。その大きい木のあつた処を、神様の御蹟

とあがめて、産土うぶすまの太木神社が出来たとのこと。坊

はほんとうによい村に生れたのや。日本武尊様がお

守りになつておいでになるよい村に生まれたのや。」

大木神社の鳥居前の京屋のおみしさんは、よいお婆

様であつた。幼い自分が遊びにゆくと、よく此の白

鳥の話をしてくれた。(佐々木信綱隨筆集 雲 P.185)

(四)翔天而向浜飛行(古事記)

・御を隔る東南二杆の所に、西富田、中富田の二部落

があり、更に遠く隔つて朝明郡の海浜にも富田村

(四日市市富田(今三重郡))此処に式内鳥出神社があり日本武尊

を奉祀する。これらの地のあることは尊の御霊が白

鳥と化して飛び出で遠く海に去つたという伝説に合

致する。富田は飛田、或は鳥田の転化であつて、白

鳥は御陵を出で、まづ西富田に出でついで中富田に

至り、その間御子たち御妃たちが小竹の刈伐に御足

を切り破り泣く泣く後を追われたのであるが、逆に

富田より海原遠く大和の方に、飛び去つたと見るので

ある。尚大和、国琴弾原の御陵の附近にも同じく富田

の地があつて両者符節を合す」(P.73 | P.74)(龜山

地方郷土史第一)

・伊勢の浜に下り立つた白鳥が大和へ向かつて飛び去

つたという地——四日市市富田町にも、鳥出神社と飛

鳥神社とがそれぞれ「わが神社から白鳥が飛んだの

だ」と主張してゐる。(読売新聞社社会部編わたくし

・ 亀山領主

・ 建部綾足は明和七年当地に来て武備塚に参籠、境内に在る車塚の上に碑（石塚）を建て尊御臨終の詠なる「波斯祈夜斯和岐弊能迦多由久毛葦多知久母」の片歌一首を刻した。

・ 一に武日塚とも書く。

・ 現行政区割は三重県鈴鹿郡鈴峰村大字長沢二二〇一番地
・ 長瀬神社（由緒のあらまし参照）ご由緒改めた。

・ 享保の頃亀山城主板倉重治この塚を以て尊の御陵と認め拜殿鳥居等を建造した。（以上亀山地方郷土史第一巻より）

△(四)加佐登の丸塚説

・ 丸塚・丸山・鴨塚・経塚・白鳥塚
・ 三重県鈴鹿郡高津瀬村（高宮、現鈴鹿市加佐登町）
・ 教部省は此の塚を以て尊の御陵と確認、関係官庁に通牒

・ 明治6年2月14日県少属橋本政信等を派遣、その兆域を量り墓掌11名を置く（P. 61―P. 62）

・ 宣長、篤胤説

（イ）元国府村の王塚説

・ 鈴鹿郡国府村（元国府）（今鈴鹿市国府町）

△(三)田村王塚

・ 一名丁字塚（又王塚）

・ 元川崎村（大寺）田村（子）女（ケ）坂（今）（亀山市）

・ 明治12・10月、内務省より突如川崎村田村王塚に改認の旨発表（P. 61―P. 62）

・ 明治13年7月明治天皇名古屋、大阪西鎮台對抗演習、天皇行幸の折全月10日掌典兼式部助丸岡莞爾を勅使として御差遣幣帛供進

・ 明38年明治天皇神宮御親閲の際11月17日侍従武官白井二郎を勅使として御差遣戦勝奉告せしむ（P. 60）

(二)弟橘姫の故郷

・ 日本書紀に、弟橘姫は「穗積氏忍山宿祢女」と明記されてゐる（紀景行天皇四十年十月、「時有_二從_レ王之妾_一曰_二弟橘媛_一穗積氏忍山宿祢之女也」）

・ 鈴鹿郡忍山は一時皇大神宮鎮座の地となり、その遺蹟に忍山神社が創建せられ、その祀官として饒連日尊五世の孫、伊香色雄命が奉仕し、その子大水口宿祢の子が忍山宿祢である。二人の女あり、姉を弟橘姫命といひ妹を弟財郎女といった。

・ 景行天皇の四十年日本武尊が勅を奉じて東夷征伐の途に上られるやまづ大和より伊勢に入り神宮を拜しそれより一志、阿濃と皇大神宮御遷幸の道を逆にとつて本郡忍山に立ちよられたといふ。こゝに於て媛はかよわき女の身ながらも夫の君の御伴して東国に向われた。（亀山地方郷土史第一）（P. 39―P. 40）

・ 東征の始から苦勞を共にし、尊をして「あづまはや」と三嘆せしめた最愛の妃の出生地の近くにて薨じ給

かくしてシロチドリは白千鳥、すなわち白い鳥の意だとする説が立てられたりするわけだが、持って廻り過ぎた説といわざるを得ない。」(P.182)

ハ、「八尋白智鳥のまま果してそんなに不都合かどうか。私は原文のまま受納していいという気がする。なぜなら八尋白智鳥と化して飛ぶと見たのは、后たちの幻視であつたはずだからだ。」

二、「礼記」にいわゆる「哭踊」に当ると思はれるとし、死者をかなしむ女の哀哭儀礼ではエクスタティックな一種狂気に近い状態が経験されたらしい。倭建命の后たちが匍匐しつつ哭くさまについてもそれはいえるわけで、そのような状態にあるかの女たちの眼に、遊行する死者の魂が幻に見えたとしても、そしてそれが「八尋白智鳥」であつたとしても、一向怪しむに足りないだろう。むしろ「八尋白智鳥」であることによつて、かえつて幻想味はゆたかになる。ホ、そしてその求めていたものは、他でもない死者の魂であつた。果してそれが白鳥と化して飛びたつのを、哭きつつ匍匐する女たちの眼にありありと視たのである。(P.185)へ、殯宮に待する后たちは、死者の魂が白鳥となつて飛び立ち遊行するのを正目に視たのである。

② 基地と行方と

(一)こ、に言ふ基地とは白鳥翔天の基地の謂であり、此の白鳥は武尊の靈魂の化して成れるもののである。

於是坐倭后等及御子等諸下而(伊勢ノ能褒野)

①・古事記には、「於是化_ニ八尋白智鳥_ニ翔_レ天而向_シ浜飛行」(景行記)

・日本紀には「仍葬_ニ於伊勢国能褒野陵_ニ時日本武尊化_ニ白鳥_ニ從_レ陵出之指_ニ倭国_ニ而飛之」(景行四十年)

・「神皇正統記も紀に同じ」

・源平盛衰記は「伊勢に移り給ふ……崩じ給ふ、白鶴と變じて……」

右の二書共に、伊勢国能褒野が翔_レ天の基地であるが

②・平家物語は、「尊は猶近江国千の松原といふ所に、悩み臥し給ひけるが、……御悩重くならせ給ひて終に失せ給ひけり。

白鳥となつて、南に指して飛び給ふ。」

・磯崎久右門家系図には、

(日本神話と 近江・橋本犀之助P.292) 「忽御足ノ熱醒_メ故此清水醒_ケ井、名附ク夫_{ヨリ}千々之松原、越_キテ_テ再御足悩給_テ終_ニ此処_ニテ崩_シ御_ケテ_テ依磯崎_ニ墳_ニ建

供奉。」

——この記には白鳥となつて飛び立つたとの記事を欠くが、磯崎神社を一名白鳥神社と呼んでゐて白鳥を神の使たへとあがめてゐる。

・「摺鳴曉暁筆の近江説

山槐記に近江国風土記を引いて、近江の志賀の松原に薨じ給うたとある。」(亀山地方郷土史第一卷山田木水著P.56)

①・旧事記に「日本武尊平_ニ東夷_ニ還參_ルノ_キ未_レト_レ參薨_ニ於尾張国_ニ」

右①②に於て②①はすべて後代の書に在るもので①の記・紀の記録を基として考へねばならず、やはり伊勢が基地となつてくる。そして現代も全国的にみて白智鳥の棲息の多い土地となつてゐる。

注(一)基地、能褒野については

(イ)元長沢村なる武備塚説

不要となるであらう。只、白千鳥は小形の鳥であるが故に、「八尋」の修飾語が難解となる。

(イ)・「歴代天皇の霊が、白千鳥として天空を翔るものとみてゐた靈魂觀のエポックがあつた。」(高崎正秀・古代文学の発想と主題 岩波講座日本文学史第三卷)

・「歴代天皇の霊がという様に一般化し得るか怪しい、白千鳥と化した伝は武尊以外にない。」(吾郷寅之進・倭建命御葬歌の原義・国学院雑誌六七卷第二号P.14)

右二者の論にて、歴代天皇と一般化し得ないとしても、「八尋白智鳥」に対して、「並々のものでなく偉大なもの」と考へた古代人の意見が見られる。

(ロ)八が日本の古典に於ては、最多数の表現であると考へ、又「弥のやに当る」(本居宣長古事記伝注)としたら、八尋を掛詞と考へて、

「天翔る空は八尋白智鳥」として見たい。

(ハ)・「浜つ千鳥」として磯伝ひし時は、白千鳥であつた。

・千鳥はその姿が可憐であるのみならず、その鳴く音が「チ・チ」と聞えて哀愁を呼び起し、「懐古・愛憐・挽歌・慕親・祝賀」の心情を感じさせる。そこに又靈鳥としての特性を見出したのであらう。多数群飛することから来た名称だけではないであらう。

・「吾が心恒に虚より翔り行かむと念ひつ」の武尊の御心は

——「旅に病んで夢は枯野を駆け巡る」(芭蕉の心)であり、

・「吾妻はや」の絶唱は

——「淡路島せとの塩風寒からしつまとふ千鳥声しきるなり」

と詠ぜられ、

・「父鳥」とも「乳鳥」とも文字を宛てたのは

——「親の無い子と浜辺の千鳥

日暮れ日暮れに袖しほる」(蘇前集)と唱はれ、

・天翔り行く八尋白智鳥の姿は、

——「夜鳴く鳥のかなしさは親をたづねて海こえて月夜の国へ

消えてゆく銀の翼の 浜千鳥」(鹿島歌)

と唱はれて、白銀の翼にて翔り去る姿に、親を慕ひ故郷を懐しむ無限の哀愁がこめられてゐる。

右(ロ)よりして要するに、

白千鳥を追ひ行く皇子達妃達の目には、

①其の心に愛慕と尊敬を湛ふるが故に

②翔り行く草の靈魂白智鳥は、見上げて白銀の如く、弥広の大空に同化して、八尋の大きく真白き鳥となつて天翔る姿が、目路

に浮かぶのである。

③之を幻視といふ

「仏は常にいませども現ならぬぞあはれなる、人の音せぬ曉にほのかに夢に見え給ふ」(梁塵秘抄)とは、よく此の心と言ひ得て妙である。(希求する者にしか見えない夢中の幻視)

註・幻視について、

西郷信綱氏は、その著「古代人と夢」に於て

イ、「倭建命の魂がかく八尋白智鳥になり翔つて行つた云々は、后たちが幻にそのように見たということだと私は考える」

(P.182)

ロ、「この矛盾をなくそうとして、シロチドリの子は、ナカコ(仲子)ナカチオヒネ(中大兄)などの子と同じ接続助詞で、

ない。又(イ)(ロ)共に推測によるもので確証のあるものとはいひ難いのであるが、芸能の伝播を考へると、地方民謡が都に上つて宮廷に入るといふ事は、その他の記紀の歌謡や萬葉や、平安朝歌謡(神楽・催馬楽等)を見れば、十分に考へられるところであり、その伝播の方法は、①都の官人が地方へ下つて持ち帰つて流行させるものと、②地方人が上洛して都人が真似し、それが又上流に伝はるものがある。とすれば、天皇葬歌としての四首の歌は、内容から見て、海岸地方の歌謡であり、(「浜つ千鳥」の語がある事により)而も舞台が伊勢の能褒野であるから、土橋・直木両氏の論の如く、伊勢地方の民謡が上洛の地方人や婦洛せる都人によつて都人に伝はり、朝廷に採用せられ、それらを葬歌としてまとめたものは、朝廷の葬礼に關係の深い土師氏によつてであると考へる事も出来るであらう。

そして「武尊の白鳥物語と何ら無關係の浜千鳥の歌が採用せられて、一つのものにまとめられたのだから差支へなし」との論も、智鳥(千鳥)には、(土橋氏の云はれる千鳥は黒色)白い千鳥もあることを知れば、「白千鳥」白ツ鳥「白鳥」の論をまつまでもない。

○白千鳥・頭上の前部及眼先ヨリ眼ノ後部ニ亘リ黒色ヲ呈シ顔頸額ヨリ眼上後ニ亘ル部分及腮ヨリ下尾筒ニ至ル全部ハ白色ナリ後頭部ハ赤褐色背以下上尾筒迄ハ淡褐色ナリ翼ノ初列風切羽ハ黒褐色ニシテ其ノ羽軸ハ白色ヲ呈ス尾羽ハ白色ニテ中央ノ二枚ダケ黒褐色ナリ翼長一一〇耗嘴峰一七耗雌ハ頭ノ黒色部幅狭ク後頭ハ褐色ナリ本邦及支那南部ニ広ク分布する種類ニシテ我国ニテハ本洲以南台湾迄各地ニ多ク棲息、

蕃殖ス(学生動物図鑑・北隆館P.93)

・文学上のチドリは小形で群れをなすシギであることが多い

日本關係のチドリは14種あるが、波に千鳥の絵画や図案のモデルは白チドリであらう夏鳥や留鳥もあるが多くは旅鳥として春秋に日本に姿をあらはす。(国民百科辞典(5)平凡社P.52)

右の解説によりて、千鳥は全国的に海岸にゐるものであり、白智鳥「白千鳥も全国の海浜にゐるものである事がわかる。文学上にも、記・紀・萬葉その他詩歌に数多く詠まれてゐる。而し、「白千鳥」として詠んだものは、古事記以外に見当らず伊勢国の和歌歌謡にも見当らず、千鳥の歌は北海道から沖縄にまで残つてゐる。

今の千鳥は、古代の千鳥の子孫であるとすれば、今の白智鳥も古代の白千鳥の子孫であらう。現代の伊勢人も亦古代の伊勢の海人の如く白千鳥を県鳥として愛してゐる。

○県の鳥に、シロチドリ

「県の鳥はシロチドリと二十日決つた。これは県が自然保護愛鳥思想を県民にというねらいから、シロチドリのほか、ケリ、ホホジロ、ウスアカヤマドリ、アヲサギの合わせて五種類の候補鳥をあげ、五月いっぱい県民からの投票を募つて決めたもので、シロチドリが一番の人氣だつたことから選ばれ投票数十五万五千五百六票で、ほほ県民十人に一人が投票した事になる。有効投票数十四万九千八百五票、シロチドリが三万七百三十七で、全体の二〇、三%を占めトツブだった。シロチドリは一年中海岸や河口付近などに生息し県下では伊勢湾ぞいを中心によく見かけられなじみ深い」(朝日新聞三重版昭和四十七年六月二十一日)

右により、千鳥の中にも白智(千)鳥があるとすれば、白千鳥も亦浜つ千鳥の一種であるから、今までの諸説の如き苦しい説明は

③の「白鳥陵」と記・紀共に記してゐるのは、

「鶺鴒ツグヒ（一般に白鳥スワン）・白鶴・鶺鴒フクロ（群飛せず）・白鷺・雷鳥（冬・雪中にては毛白し）・白千鳥」の総称が「白ツ鳥」＝「白鳥」であるからであらう。

以上各説に対して私見を述べて来たのであるが、要は、「白智鳥」に「八尋」の修飾語を冠し、「智鳥」に「白」の形容詞がある事に問題があるわけである。

古代には、そういふ大きな白智鳥がゐたといふことがはつきりすれば問題ではないが、古事記以外（而も一所のみ）に文献上何も見当らず、又現代もその子孫は見当らない。とすれば諸種の解釈が起つてくるのは当然である。

その解決策として、天皇葬歌と白鳥伝承物語との關係に着眼したのが、(一)土橋寛(二)吾郷寅之進の両氏である。今迄の文献学的研究に民俗学的研究法を導入したもので、国文学研究には、色々な方法を採用せねばならないといふ事を痛感させられる次第である。

所で、

△土橋氏の「靈魂鳥としての白鳥」と「浜千鳥」とを結合した新造語の説は、旧来の訓詁注釈学的研究に対して、劃期的な、勝れた見解である。只、「浜っ千鳥は小形の黒い鳥」としてをられる所に、考慮の余地があると思はれるし、

△吾郷氏の「天皇葬歌は、元來白鳥伝承の中に生まれたものでないので、(八尋白智鳥となつて飛び立ち、それが浜っちどりの事のように歌はれてゐても)別々のものを都合よくつけ合はせたものだから、浜っ千鳥で何ら差支へない。」の論は、土橋氏の所論と似てゐるが、「浜っ千鳥」で何ら差支へない」として一步

を進められた論であると思はれる。只、「千鳥と白鳥と」の關係についてはやはり不明瞭である。

さてどういふ風にして習合されたかについては、

(イ)土橋氏・古代歌謡全注釈古事記編には、「つまり物語述作者は、多くの歌垣の歌の中からの三種を選んで靈魂鳥の物語を述作した。」「天皇葬歌の創始者がすなわち靈魂鳥追跡物語の述作者といふ事になるが、それは古事記以前に土師氏の家記の中にあつたものではあるまいか。」(P. 163)

・全氏・古代歌謡の研究には、

「白鳥陵を作つたといふが、志幾古市の付附は、応神・仁徳陵を含むいわゆる古市誉田古墳群のある所であり、土師氏の本拠地であつた。」(P. 186)とあり、白鳥陵のある土地の土師氏の手になるものとの説があり、別に

(ロ)土橋寛・「古代歌謡」(岩波講座「日本文学史」二)

(1)「伊勢の海部出身の駈使丁の歌が宮中にとり入れられたのが天語歌であらう。」

(2)「四首の挽歌は、伊勢海部の間で唱和されてゐた伊勢地方の民謡で語部として宮廷に仕へた伊勢海部によつて中央に伝へられたのであらう。」

右(1)(2)の論をとり上げて

(イ)直木孝次郎・「天武持統兩朝は、特に大神宮崇敬が深いために、伊勢系の所伝が重視されて伊勢の民謡が四首の葬歌に入った。」(日本古代の氏族と天皇P. 298)と論じてゐる。

右(イ)に於ける土橋寛氏の所論をとり上げて直木氏は(ロ)の「伊勢海部の民謡が四種の挽歌となつたと」してをり、(イ)の論は採つてゐる

②千鳥の修飾語が「白」であるか「浜」であるかの相違によつてであるか

③何かその他の理由によるか

右の如き疑問も出て来るのである。

松岡静雄氏の「漫然智の字を加へたとする説も誤つてゐる」との説を参照するならば、⑦の音と智の字義とを考へて「白智鳥」と記したとも考へられるのである。辞書によると「智と知」は、

——智嫻　・古文は知と音と白との合字

△(上田万年他)　・物事を明にすること

——知は　・知能の知(知ること?)

——智は

・巧を加へた意がある

△(諸橋筋次)　・知識の知(知つて区別すること?)

松岡静雄氏によると、「チトリは靈鳥」の義であるといふ(日本古

語大辞典語法 P.694)事を考へて見るならば、

——血(靈液)　・命(息ノ靈) (大島正健・国語の語根 雷(イカツチ)　・

大蛇(オロチ) 遠呂智・屋船久久・運命是末 (祝詞大殿祭)　・

軻遇突智(神代紀上) 道速振(神代紀)(時代別国語辞典上代編)

右の諸例によつても、⑧には靈性表現の音である事が伺へる。而

し「智」の字は、

△古事記、「於是化^コニ八尋白智鳥^{リテ}翔^ヒ天向^ヒ浜飛行^キ」

△日本紀、「時^ニ日本武尊化^リニ白鳥^トニ從^ヒ陵出^テ之指^ニ倭国^ニ而飛^ヒ」

古事記にのみあつて書紀にはないのである。

「白鳥」に靈性を感じて、「白智鳥」と記し、日本武尊の「神聖なる靈」が「八尋白靈(『神聖なる』鳥)と化りタマヒテ、と感じて

斯く記したものと考へなす事も一方法であらう。「智」の字が古文の「嫻」より出づるものとせば、「智」の字の「知」下の「白」は「白」であると思はれる。

更に「智」以上に「白」の文字に靈性を感じてゐいたであらう事は、記紀以後の古典に幾多の用例が見出される事によつて推測出来る。

白の表現内容として、

(1)神聖(神秘・尊貴) (2)神怪(神秘・不可思議) (3)清潔(善美・

哀愁) (4)靈性 (5)言語(発音)

右の如きものが挙げられる。諸例を見るに、

(1)白鬚大明神　・白龍大権現　・白象

・礼記(孟秋之節)　・月令(天子衣白衣服白玉)　・白は天子の色　・素菟(記・神代)

・白狗(紀・武尊・信濃山中)　・白鳥(記・紀・仲哀慕親)

・白鶴(源平盛衰記・武尊靈)

・白髮大倭根子命　・白坂活日子郎女　・白髮武広国押稚日本根

子天皇

(2)白鹿(記・紀倭建命)　・白猪(記・伊吹山)　・白鶯(靈泉

発見・幽怪小説)

(3)白和幣(記・神代)　・白衣(神祭・葬祭・堵腹)　・白雉・

白鳳(年号祥瑞)

・白眉(兄弟中の傑物)　・白旗(平和・降伏)

(4)白鳥　・白鷺　・魄(白と鬼と)

(5)告白　・白状　・啓白　・鶴コク　・こののとり、くぐひ、白鳥

の一、

(記中卷垂仁天皇条・紀卷第六垂仁天皇条、「鶴『白鳥』を見て言語を發したまふ)

△出雲風土記（嶋根郡）に

・八尋鉾長依日子命

の如き「尋」の文字が見えて、「ヒロ」と訓んだであらう事は、

△神代紀上乙本には

・化作八尋之殿（八尋之殿也比呂止乃）とあるによつ

て考へられるのである。

次に、日本古典に見える「八」が最大多数を表はしたであらうことは、

△記・八重垣・八衢・八重柴垣・八俣袁呂知・八嶋国・八尺勾瓏八

十神・八十掬手・八十建・八十王・八十歳・八十毗良迦・八十

禍津日神・八拳須・八百萬神

△紀・八咫鏡・頭八咫鳥・八千矛神・八重雲・八重席・八重蒼紫籬・

八達之衢・八握髭髯・八尋熊罴・八竿八縵・八百重・八十・八

十艘船・八十隈・八十梟師・八十五籤・八十連統・八十手・八

十河中・八十木種・八十子・八十平瓮・八十枉津日神・八十諸・

八十諸部・八十萬神・八十萬神達

△万葉・天雲之八重・八重雲隱・八重置・八重浪・八重六倉・八重山・

八百日・八百萬・八峯・八丘・八千年・八千梓之神・八千戈神・

八衢・八千種・八千鳥（人名）・八十伴男・八十鳥・八十瀬・

八十隈坂・八十氏人・八十氏河・八塩乃衣・八鳥・八鳥国

右の如きものが見えて、いづれも数多き事の最上級を表してゐると思はれる。するとやはりこの「八尋白智鳥」も亦「八」は最大多数を表するものとしての「八」であり、「大きな智鳥」といふ事になる。（八尋矛（記）・（風土記）八尋罴（紀）がやはり考へ併せられる。）「八尺の勾瓏」の意味として、古事記伝四に、「八尋殿の註に、

八尋は殿の広さの度を云るにて、八は必ずしも七八と数ふるにはあらず、弥の約りたる言なり」（増本居宣長全集一P.138）と述べてゐる。八は字形の如く末広がりにて、「いよく広大」の意をもつとの意であらう。

②の「白智鳥」が一番の論点であるが、智の字は、「八尋白智鳥」の語だけで、次の浜つ千鳥の語は、「知登理」となつてゐる。記紀萬葉には、チドリ宛字は、

古事記	日本書紀	萬葉集	
知抒理	知耐理	知杼里	知鳥
知登理		知等里	千鳥・乳鳥
智鳥		智杼里	智鳥

右の如く表記せられてゐて、智の字は記紀萬葉共に用ゐられてゐる。智の字は

△紀（神代下）・沖つ藻は辺には寄れどもさ寝床も與はぬかもよ播磨都智而理登

右記紀萬葉の文字の用例を比較するに、内容による区別は認められない。（智と知と）。（丸山林平氏は「上に智とありここに知とある。もつて記の用字が宣長らの信ずる通りに統一されたものではないことを知るべきである。」と注校本古事記に述べてゐる。）

而しこの古事記の伝説歌謡の場合、「八尋白智鳥・波麻智都登理」の如く、「智と知」の区別をしてゐるのは、

①それ／＼別々の伝説歌謡が一つの場面にまとめられたためであるか、

に同じ論である。

——宜長は、意味は白鳥の事であるが、「チドリ―父鳥」の意見(仲哀天皇の事から)を出し、これは昭和の「いてふ本古事記」に継承されてゐる。

——敷田年治の「はまつちどりは次に『波麻用波』を呼び出すための言葉」の意見も、中村烏堂『古事記・日本書紀の歌』の中に「浜っ千鳥は浜の枕詞である」と述べられてゐる。

更に言霊思想からの解説に、

(I) 松岡静雄・日本古語大辞典には、

・シラチトリ(白智鳥)倭建命の神霊の権化

・八尋は其の大なる事をいふもので、チトリは霊鳥の義である。

チトリが今いふ千鳥でないことは勿論であるが、漫然智の字

を加へたとする説も誤つてゐる。(P. 694)

(II) 水野満年・神聖遺訓として見たる古事記

・大なる白智(ちの言霊に、内に強く満ち足る精神の溢れ究る義あり)鳥が化生し出たるなり

以上は「智」の字に全然意義を認めないものと言霊的な認め

方をするものとの二種であるが、而し「白千鳥」の存在は認

めてゐないのである。

④の論に於てようやく近代的解釈が行はれて、解決の光が見えて来たといひ得るのである。それは、(1)「八尋白智鳥」が不可解な語であることは誰しも認めて来た所である。(即ち大きな白い鳥(八尋白智鳥)を小形の黒色の鳥(浜っ千鳥)にたとへてゐるからである。)(2)

(イ)両者をヤマトタケル尊伝説の歌謡として結合した理由の解釈に、近代の民俗学的解釈を導入した事である。即ち浜っ千鳥の四種の歌

を、「野中・古市の民謡」(歌垣の歌)もしくは、「伊勢海部の民謡」がとり入れられたとする説(土橋寛・古代歌謡の世界・古代歌謡全注釈)であり、更にそれを発展せしめて解決に近づいたのが、吾郷氏の説なのである。

さて、「不可解な語」(日本古典大系注・土橋寛)としての「八尋白智鳥」は、以上先学の諸論により解決した様であるが、而しまだ疑問が残る。それは

①「八尋」の語がついてゐる理由

②「白智鳥」は、「智鳥―千鳥」とした場合に、「白」がついてゐる理由

③「白鳥陵」といつて「白智鳥陵」とは云つてゐない理由についてである。

①の「八尋」の修飾語のついてゐる理由は、「八尋」の訓には、「ヤヒロ」、「ヤイロノ」の二訓が見られる。

・「ヤイロノ」は、△延佳本 △兼永筆本

・「ヤヒロノ」は、△古今和歌略註(賀茂) △校訂古事記(田中)

△古事記講義(大久保)

△国史大系(古事)(九山) △標注古事記(二郎)

・「ヤヒロ」は、△寛永版本古事記 △古事記伝 △訂古訓古事記を

はじめとして現代に至る諸注釈の大多数はこれである。

右の訓中に「尋」は「ヒロ」と漢和辞典の訓にあり、又

△古事記に「尋和邇(神代)

・比比羅木之八尋矛(景行)

△日本紀に「海神所乗駿馬者八尋鰐(神代)

持つ古事記が物語地において八尋白智鳥とするのは、天皇葬歌第四歌の「浜つちどり」に合わせるための作為であることは土橋氏も説かれたとおりであろう。」

(ロ)「天皇葬歌は、私見によれば元来白鳥伝承の中に生まれたものではないので、浜つちどりでなら差支えない。かりにヤマトタケル葬歌としての成立の方が天皇葬歌としてのそれよりも前であるとすれば、古事記の方の伝承者は当然に第四の詞句を変更して白鳥とするであろう。」

(ハ)「書紀の白鳥と古事記の八尋白智鳥とは、前者の方が古いものである。」

靈魂の化して飛行する鳥は、応陵その他古墳出土の埴輪からみても、また風土記にみえる地名や伝説からみても、白鳥であるのが一般である。また小さなちどりであるのが一般である。また小さなちどりでは、壮大な、浪漫的なその上孤独の英雄ヤマトタケルのイメージにふさわしくない。それで古事記の物語もこれを八尋白智鳥というように巨大化したのであろうが、

(ニ)これは第四歌と矛盾しないように、しかも「ちどり」という矮小感を除きかつ白鳥のイメージを損わないように用意されたことばであると思われる。」(P.16)

(三)要するに右の諸論は、

①の論に於いては、㊦は㊧の転化した音であり、智はチを漢字で表したに過ぎず、何の意味もない。白智鳥は、白つ鳥であり、白鳥の事である。「㊦は助語(荷田)・助辞(真淵)・接続助詞(武田・高木)・格助詞(倉野・尾崎)」従って「白鳥の御陵」といふ名に反しない。但しはじめから「八尋白鳥」と云はなかつたのは、第四歌の「浜つ

千鳥」に合はせて「八尋白千鳥」の語を作り上げたのであろう、との論であると考へられる。

・思ふに、㊦が㊧の転音である事は、

△萬葉一―13中大兄^{ナカノオホ} △一―3中皇命^{ナカヒメミコ} △一―10中皇命^{ナカヒメミコ}

△二―128仲郎^{ナカヲ} △二―128^{ナカヲ} 仲郎^{ナカヲ}

△紀卷第十五頭宋元年二月、仲子^{オチコ}

△ 十七仲日^{ナカチ} 茨田皇女^{ヒサノミ}

△ 十四雄略天皇既位前紀帳内佐伯部壳輪^{更名部(手一千の)誤り?}

右の諸例よりして

仲(ナカチ)↑仲手子(ナカチコ)↓仲子(ナカチコ)と訓み仲

ツ子の意味であり、㊧の代わりに㊦の音を用ひた例証となし得る。

而し、この論ではまだ、

①「何故始から「白鳥」と云わなかつたか、何故「浜つ千鳥」の

語を出したのか」が判然としない。更に

②「八尋」の意味もはつきりと述べられてゐない。」

③の論に於ては、(1)(2)(3)(4)の論皆、八尋白智鳥||白鳥と考へてゐる事は同様である。

―宣長と年治とは、白智鳥と記したのは、後人の私見で智を加へたのであらうと考へ、前者はそれでもまだ疑を有し、後者は訓み消してしまつてゐる。

―宣長と守部とは、前者は、皇子達が浜辺を追ひ行き、千鳥にたとへて浜つ千鳥とよまれたから白智鳥といつたまでであるとし(佐野保太郎・古事新解も之を継承)後者は左行右行し翔り飛んで行つたから智鳥といつたまでで、立鳥の夕の省略されたものであり、やはり白鳥の事であると考へてゐる。三国幽眠も後者

るかとも思へど智^チ字以^レ音^ヲと注まであれば然にも非じ故^レなほ
つらくに思ふに后等御子等の

②千鳥に譬へて波麻都知登理とよみ給へる哥につきて推^{オシ}て此^{コノ}白鳥
を白智鳥と呼ぶを始^{ハシ}めもめぐらして然語り伝へたるか」

③「又彼ノ仲哀紀に御陵域の池に白鳥を養^{オホ}て大御父王を恋慕^{オホシ}ひ座^マ
御情^{ミコトコ}を慰めむと詔へるにつきて思ふに当時其^{ソノトキ}白鳥を父鳥^{チドドリ}と天皇
の呼^ヨへるを世^ヨ中にも伝へて然呼^イるを始めもめぐらし及ぼして
白父鳥^{シロコドリ}とは云るにやあらむ智^チ々を智とのみ云は凡て同音の垂れ
る言は一ツ省きて云例は多きなり」(P.1491—P.1492)

(2) 橘守部・稜威言別(増訂橘守部全集第三)

①「波麻都知登理は浜智鳥なり上の白智鳥の事なれども此^{コノ}は浜辺
にてのことなれば浜をそへて詔ふなり。さて紀に獲^ウ白鳥云云
欲^{ホシ}慰^ナ三顧情^{ミクワン}と見え其陵を白鳥基と称^{イハ}れば唯大きな白鳥
なりけんを

②如此^アしも左行右行あふさまるさに翔り飛て終に留らざりけるを
以て智鳥とは称し給ひけんを……」(P.129—P.130)

③「世に千鳥と云鳥の名義立鳥の上略にやあらん。彼鳥の洲^スなど
に居は罕^アにしていつも大かた浪に連れ風に競^ヒて唯あふさまるさ
に立^テ飛^ビを心とせり。日本武尊の段の白智杼理^{コトコカン}
居^{コノ}事^ノのなかりけるなど
の名義をも又思ふべし」

(3) 三国幽眠畧解古訓古事記中

「白智鳥浜千鳥ニタトヘテヨミ玉フなり。」

(4) 敷田年治標注古事記標註中巻之下(明治11年)

(イ)「紀に日本武尊化^{ナリ}白鳥從^{ナリ}陵出とあるを此記に略^ハきて伝へたり」
(ロ)「扱白鳥を白智鳥と記せるは後人の私意に智^チ字を加へたりと察

ゆれば訓減^ミつ」

(イ)「波麻都知登理ハ浜津千鳥にて次に波麻用波と云^フ語を呼^ヒ出むた
めに設けたる詞なれば千鳥に意はなきなり然るに此千鳥を白鳥
の事也と思ひとりて上に八尋白鳥とありけむを間に智^チ字を補^フへ
智^チ字以^レ音^ヲをさへ加へたる後人の私意^{サカシ}なる事を知^ルべし」

①(1)土橋寛・古代歌謡集(日本古典文学大系)(昭和32・7・5)

「白智鳥は不可解な語で書紀には単に白鳥とある。」(P.58頭注)

(ロ)土橋寛・古代歌謡全注釈(昭和47・1・24)

「八尋白智鳥とあるのをどうして浜^ハつ千鳥と歌つたのかといふ
点について記伝は、下に浜^ハつ千鳥を云^フ料にかの白智鳥を千鳥に譬^ヘ
てよみ賜へるなりと言つているが、八尋白智鳥(大きな白い鳥)
を浜^ハつ千鳥(小形の黒い色の鳥)にたとえたというのはいかに
も苦しい。「言別」はこゝに浜^ハべのことであるから八尋白智鳥を
「浜^ハつ千鳥」といつたのだといふけれども、これも苦しまぎれの
説明でしかない。(P.169)前文の八尋白智鳥という不可解な語も
靈魂鳥としての白鳥とこの浜^ハつ千鳥とを習合した造語と見るこ
とができよう。」(P.160)

(ハ)土橋寛・新^白歴代文学選上世編解説(昭和47・1・24)

「八尋白智鳥、大きな白い千鳥の意、千鳥は小さな黒い鳥であ
るから、八尋白智鳥という語は疑わしい語で、書紀に単に白鳥
とある。これも物語と歌とを結びつけた結果であるとするとう
なずけるのであつて、浜^ハつ千鳥の歌と物語の白鳥とを結びつけ
たものであろうと思う。」(P.42)

(2) 吾郷富之進・倭建命語葬歌の原義(一)(二)

(イ)「四歌を欠いている書紀が白鳥とするのに対して、これらを

・四―五白鳥能飛羽山松之待乍曾吾恣度此月比乎

・九―1687白鳥鷺坂山松影宿而往奈夜毛深往乎

△出雲国造神賀詞に

「白鶴しろとり生御調なごしら玩物あそびもの……」

以上上代文学に見えるものはすべて、古事記以外は「白鳥しろとり」である。

而も古事記には只一度しか見えぬ文字（白智鳥）である。又上代以後の文学に於ても、管見に入る限り、「白智鳥」の語は一つも見当らない。

（上代文学に於ける新造語と見えるものに、柿本人麿の「夕浪千鳥」の語があるが、これは後世の和歌や歌謡にも採られている。）而もその御陵の名は、記紀共に「白鳥の御陵」とあつて、「白智鳥の御陵」とは記されてゐないのである。

故に、古来この「白智鳥」の解釈には種々の意見がのべられて来たが、未だに解決を見てゐないのである。

(二) 先学の意見を見るに、

①(1)・度遇延佳・鼈頭かめがしら古事記4.2.29に注なし

(2)・契沖・厚顔抄（契沖全集五P.68）

「蘇良波由加受虚者不行ナリ白智鳥ハ虚ヲ行ハ我等ハ虚ヲユカネハトノクマフナリ」とあつて、白智鳥の解説はない。「波麻都知登理浜津千鳥ナリ」とあり、白智鳥と浜津千鳥との

関係についての説明がないので不明である。

(3)・荷田春満・古事記14.6.14節記中

「白知鳥とは白鳥と言ふ事也知は助語なり」と述べてゐる。

「波麻都知登理とは白鳥を指て浜つ千鳥とのたまふ也」と述べてゐるが、何故浜つ千鳥が「白鳥」であるのか理由は述べてゐない。

（荷田全集第六卷P.217）

(4)・賀茂真淵・古事記和歌略註に、

「此こゝに尊八尋ウツチノの白鳥しろとりと成て顕卿云しとり也ツチ共に助字也

(5)・武田祐吉・記紀歌謡集昭和31.5.20全講

「白千鳥は、白い鳥の義で、千は接統の助詞であらう。仲子、仲大兄それぞれナカチコ・ナカチオヒネと読んでゐる。」（P.90）

(6)・倉野憲司注校・古事記祝詞（日本古典文学大系）

「白千鳥は、白い千鳥の意か、千は格助詞ツの転音で、白ツ鳥即ち白鳥の意か明らかでない。（ナカチコ||仲子・ナカチスメラミコト||中皇命などを参照）」（P.22）

(7)・高木市之助注校・上代歌謡集（日本古典全書）

「ソロチドリは白い鳥、チは接統の助詞かといふ（武田氏）」（P.103頭注）

(8)・尾崎暢殃・古事記全講（昭41・4・5）

「白智鳥の智は中子などという場合のチに同じく連体修飾格の助詞であらう。それで結局白智鳥は白い鳥の意に帰着する。」

「この白智鳥の語義、たゞし白智鳥を白い千鳥の意とする解もある。後出の浜つ千鳥と同じ鳥ならば海浜にすむ涉禽類のチドリであるかもしれない。」（P.456）

②(1)・本居宣長・古事記伝増本本居宣長全集第三

「白智鳥は書紀には白鳥とありて此記にも御陵の名は白鳥とあり」

「さて其こゝを此こゝに白智鳥としも云る由も

①詳サカならず「白サカ千鳥を云るかとも思はるれど千鳥にはあるべからず千鳥ならむにはたゞに白鳥とは云べからず右の仲哀紀の趣も千鳥とは聞えざればなり又此も元は白鳥とありけむを次なる歌に知登理とあるに依りて後の人のさかしらに智の字は加へた

白鳥翔天考

——八尋白智鳥とその行方——

岡部直裕

- (一) 白鳥と千鳥と
- (二) 基地と行方と
- (三) 第三の神放ひ

記・紀中随一の悲劇として倭建命の伝説歌謡を挙げる事は、古来誰れしも認めて来た所で、本居宣長の「もののはれ」も、源氏物語と並んで、更に痛切に、古事記伝に於いて見出されるのである。

「終焉の美しさと漂泊の哀しさ」を「八尋白智鳥」に託してゐる古事記は、これだけで文学書としての価値を備へてゐる。只、古事記に見える用語と内容については、諸注釈に見ても判然とせぬものが多い。今(一)(二)(三)の事柄について考察し、古事記解明の一端としたい。

一

① 白鳥と千鳥と

(一)「八尋白智鳥」の語は、

△古事記中巻景行天皇の条に、

「放_レ是化_ニ八尋白智鳥_ヲ翔_レ天向_レ浜飛行_以智乎_」とあり、次に三つ目の歌に、

「波麻都知登理波麻用波由迦受伊蘇豆多布」とあり、更にその後河内国志幾に留まり其地に御陵を作りて鎮まり座さしめて、

「即号_ニ其御陵_ヲ謂_フ白鳥御陵_」とある。

△日本書記卷第七景行天皇の条に、(四十年是歳)

「時日本武尊化_ニ白鳥_ニ從_レ陵出_之指_ニ倭国_ニ而飛_{……}於是遣_ニ使者_ニ追尋_ニ白鳥_{……}白鳥更飛_至河内_{……}故時人号_ニ白鳥陵_」とある。更に

△日本書記卷第八仲哀天皇元年の条に、

「冬十一月乙酉朔……父王既崩之神靈化_ニ白鳥_{……}翼獲_ニ白鳥_ニ養_ニ之於陵域之池_{……}則令_ニ諸国_ニ俾_レ貢_ニ白鳥_」

「閏十一月乙卯朔戊午越国貢_ニ白鳥_{三隻_{……}時蘆髮蒲見別王視_ニ其白鳥_{……}則蒲見別王謂_ニ越人_ニ雖_ニ白鳥_ニ而焼_之則為_ニ黒鳥_」とあつて、}

△風土記には、

常陵風土記香島郡

「郡北三十里白鳥里古老日伊久米天皇之世有_ニ白鳥_ニ天飛來_{……}童女等志_止利及_志勢賀部_々弥乎都々斯口口唱_{……}由_レ此其所号_ニ白鳥郷_」

風土記逸文 山城国

「伊奈利社……秦家中家忌寸等遠祖伊侶具秦公積_ニ稻梁_ニ有_ニ富裕_ニ之用_レ餅為_レ的者化成_ニ白鳥_ニ飛翔居_ニ小峯_」

全 近江国

「古老伝日近江国伊香郡與胡郷伊香小江在_ニ郷南_ニ天之八女俱為_ニ白鳥_ニ自_レ天而降_{……}遙見_ニ白鳥_ニ其形奇異_{……}」

全 豊後国

「昔豊後国球磨郡二ヒロキ野ノアル所大分ノ郡ニスム人_{……}弓ライケルニマトノナカリケルニヤ餅ヲククリテ的ニシテイケルホドニソノ餅_{キト}白_キ鳥_ニナリテトビサリケリ_」

△万葉集には、